往生浄土について

中央仏教学院講師　貴島信行

一　はじめに

親鸞聖人が開かれた浄土真宗は、本願の宗教であり、往生浄土の教えを根本としています。往生浄土とは、法蔵菩薩の因位の発願修行によって完成された阿弥陀仏の国土に、一切衆生が等しく往生せしめられ、仏に成るという教えです。

しかしながら、今日ではそうした往生浄土という根本の教えが、なかなか人々には受け入れがたく、信じられなくなっている状況があります。「地獄、極楽はこの世のいましめ、楽しみのこと」であったり、実生活とかけはなれた空想の世界として考えられていて、門信徒の家庭においても、仏参の折にかつて私たちが祖父母や両親から聞かされたような「おじょうど」「あみださまのくに」についてのお話、そうした言葉にこめられた懐かしい語感も伝えられなくなってきており、心豊かな情操教育というものがおろそかになっている傾向にあります。

核家族化や人口移動による社会構造の変化など、様々な要因によって宗教教育の場に影をおとし、ことに学校においては知識偏重の教育、科学的思考がすすんでおり、宗教的なものの見方や考え方が人間形成において重視されなくなっていると感じるのは私一人だけではないと思います。

ですから「往生」という言葉も、辞書に「あきらめてじっとしていること。どうにもしようがなくなること」とあるように、本来の宗教的意味に反して、物事が行き詰まった状態や困難に直面したときに発する言葉、難渋した場面に使用する用語として一般常識化してしまっていて、人生を支えるような宗教的言語としての機能、生命というものが見失われてしまっているようです。

いま、往生浄土について、ここでは経典にあらわされた教説を親鸞聖人はいったいどのように理解されておられるのか、また仏果を得ることを目的とする教えが、現実の私たちの人生にどのような意義をもたらすものであるのかを探っていきたいと思います。

二

浄土真宗がもっともよりどころとする経典である『仏説無量寿経』には、阿弥陀如来の四十八願が示され、名号による衆生の救済が示されています。

つまり法蔵菩薩が世自在王仏のみもとにて、一切の諸仏の世に超えすぐれた仏となり、清らかな仏国土を建設し、生きとし生けるものすべてをその世界に誕生せしめ、さとりの身を実現させたいという誓いを建て、そのごとくに功徳成就されたことが説かれております。その四十八願のなかで、とくに衆生の往生と仏の正覚（さとり）が一体として誓われている第十八願は「選択本願」「本願」といわれ、最もかなめの願であり、根本の願といわれるものです。

第十八願には「たとひわれ仏を得たらんに、十方の衆生、至心信楽してわが国に生ぜんと欲ひて、乃至十念せん。もし生ぜずは、正覚を取らじ。ただ五逆と誹謗正法とをば除く」（『註釈版聖典』18頁）とあり、また本願成就の文には「あらゆる衆生、その名号を聞きて、信心歓喜せんこと、乃至一念せん。至心に回向したまへり。かの国に生れんと願ずれば、すなはち往生を得、不退転に住せん。ただ五逆と誹謗正法とをば除く」（同41頁）と示されています。

親鸞聖人はこの両文によって、もろびとが等しく阿弥陀如来の浄土に往生し、仏果を得ることができる正しき因が、仏に成るためのあらゆる功徳が成就された名号を聞信することにあり、しかも救いの対象がひとえに「五逆」「謗法」という、ことに罪業深重の凡夫に向けられていることを明言されたのでした。

浄土について、親鸞聖人は『教行信証』真仏土巻に、第十二願（光明無量の願）と第十三願（寿命無量の願）の両願を挙げ、「つつしんで真仏土を案ずれば、仏はすなはちこれ不可思議光如来なり、土はまたこれ無量光明土なり。しかればすなはち、大悲の誓願に酬報するがゆゑに、真の報仏土といふなり」（同337頁）と示されています。

つまりさとりの世界を人格的にあらわせば、永遠のいのちを完成された阿弥陀如来にほかならず、また場所的にいえば、智慧の光明にかがやく広大な国土であるといえるのであって、しかもこの仏身と仏土の関係はもと

もと一体のものであると受けとめられています。迷いの世界はすべての存在に限りがありますが、浄土は限りなきいのちとひかりに満ちた世界であるといわれるのです。

また『唯信鈔文意』においては、それが涅槃界であり、滅度、無為、安楽……そして法性法身（同709頁）など様々な言葉で説明されています。これは浄土が本来人間の言葉や思慮を絶した、色もなく形もないという寂滅平等、空無我の境界であるからです。しかも一方で方便法身、報身仏、報仏土であるともいわれるのは、それが菩薩因位の誓願のとおりに報われ成就された本願功徳荘厳の世界であり、法性法身は寂滅にして無色無形ではあるが、つねにこの世に来生して色や形を示し、名を垂れて、私たち凡夫に認知されうるものとして説かれていることをあらわすためです。

法性法身、方便法身とは、その名は異なれども本来両者はわかつことができないものであって、真実の内容を二つの側面から述べたものといえるのです。

三

『仏説無量寿経』によれば「法蔵菩薩、いますでに成仏して、現に西方にます。ここを去ること十万億刹なり。その仏の世界をば名づけて安楽といふ」（同28頁）とあり、『仏説阿弥陀経』には「これより西方に、十万億の仏土を過ぎて世界あり、名づけて極楽といふ。その土に仏ます、阿弥陀と号す。いま現にましまして法を説きたまふ」（同121頁）と説かれ、極楽浄土が西のかなたの遙か遠きところにあるとして、場所的数量的に表現されています。

他にも国土が数々の宝珠や宝石によって飾られ、宝樹、宝華、宝池、宝楼閣によってしつらわれた世界であるといわれ、現世における価値観に寄せてのきわめて具象的な表現が見られます。

さらに『仏説観無量寿経』発起序においては、釈尊が、わが子の反逆によって激しい苦悩に直面し悲しみにうちひしがれ涙する母、韋提希夫人にむかって「なんぢ、いま知れりやいなや。阿弥陀仏、此を去ること遠からず」（同91頁）と語られています。

これは韋提希一人のみならず、われら未来の凡夫に対して、仏国土という

存在があくまでもこの現世を遠く隔絶しながらも、また限りなく現世のただなかに来るものであるという意を告げられたものであって、「苦悩を除く法」といわれる本願念仏は、ひとえに悪人凡夫の苦悩に直接してよびかけてくる、浄土のはたらきそのものにほかならないことを教えようとされたものです。

親鸞聖人が晩年関東にあてられた手紙のなかに、「かくねむばう」という弟子の往生について、「かならず一つところへまゐりあふべく候ふ」「さきだちまゐらせても、まちまゐらせ候ふべし」（同770頁）との表現があり、私たちの人生の最終的帰依処を身近に教示されるところがあります。それもまた、念仏者には必ずともに会うことのできる「倶会一処」（『仏説阿弥陀経』、同124頁）の世界が用意されているのであり、その人生はどのような生死の苦悩、愛する人との別離の苦をも乗り越え、大悲のなかに生きるよろこびが与えられていくことを伝えようとされたからにほかなりません。

このように、浄土という在り方は、一面では凡夫の思慮分別や人間の欲望充足の延長線上にあることをどこまでも否定しながら、また一面ではあくまでも凡夫に信知せられ願われるべき世界として説かれているということが知られます。

往生とは、文字通り仏国土に「往きて生まれる」ということですが、浄土の存在は、私たち凡夫の人生生活に即してつねにはたらく大悲無碍の活動そのものといえるのであって、往生浄土が、単にこの生命が終わることによって実現するという意味ではなく、新たないのちへの誕生を仏の方からこの人生において今賜っていく教えであると受けとめることができるでしょう。

親鸞聖人は、往生を一つには「難思議往生」（『教行信証』証巻、同306頁）と示し、信心を賜った人は命終のときにただちに浄土に生まれ、滅度（煩悩を滅したさとり）の仏果を得ることとされています。また二つには「即得往生、住不退転」（『仏説無量寿経』同41頁）の意によって、本願力の名号を信受する人は、ただちに正定聚（迷いの世界に決して退転することがなく、当来には必ず仏果を得る身と定まる）に入る意とされ、二様の解釈が見られます。

この二つの関係については、「証巻」に「しかるに煩悩成就の凡夫、生死罪濁の群萌、往相回向の心行を獲れば、即の時に大乗正定聚の数に入るなり。正定聚に住するがゆゑに、かならず滅度に至る」（同307頁）と述べら

れ、『愚禿鈔』には「本願を信受するは、前念命終なり。すなはち正定聚の数に入る……即得往生は、後念即生なり。即のとき必定に入る」（同509頁）とあって、本願を信受し正定聚の位に住する人は、命終における仏果はもはや必然であるとして、むしろ信心獲得のところに救いの重要性があることが語られています。

また『唯信鈔文意』には「能令瓦礫変成金といふは……如来の御ちかひをふたごころなく信楽すれば、摂取のひかりのなかにをさめとられまゐらせて、かならず大涅槃のさとりをひらかしめたまふは、すなはちれふし、あき人などは、いし・かはら・つぶてなんどを、よくこがねとなさしめんがごとしとたとへたまへるなり。摂取のひかりと申すは、阿弥陀仏の御こころにをさめとりたまふゆゑなり」（同708頁）との文によって、阿弥陀如来のはからいにより、あたかも不思議な錬金術によって変化するように、本願を信楽する人は等しく無上の功徳が恵まれることが述べられています。そこでは、もはや凡夫が抱く世俗の空しい価値観がひるがえされ、優劣を超えたさとりの価値へとすでに転換されていることが知らされます。

四

今日の日本では、近代以降の欧米化により、合理主義、科学的実証主義が一段とすすめられ、大宇宙の成り立ちや、自然界の法則性、生命における微細な構造と仕組みについて解明がなされ、とくに医学での進展によって、私たちは日頃その医療の恩恵に浴し、様々な利便性を享受して生活しています。

しかしながら、一方では科学を悪用して私利私欲を満たそうとする犯罪が後を絶ちません。国家間では核兵器をはじめとした大量兵器によって他国を威嚇し、あらゆる生命の存続を脅かしています。現在繰り広げられている世界各地での戦争は、宗教と複雑にからみあって、かつてない広範な規模となり、理不尽にも多数の尊いいのちが傷つけられています。科学文明によって引き起こされる戦争や公害によって、凄まじい環境破壊がもたらされているのです。

他の生命をかえりみることなく、いのちを傷つけ、犯罪を引き起こしていく人間罪業の所作は、その根底にきわめて自己中心のこころが渦巻いていることに、私たちはまず厳しい目を向けなければなりません。さらには、人間の知識や分別、理性を絶対視せず、科学的なものの考え方によってすべてを解決しようとすることの危うさに思いをいたし、人間の奢りを捨て、謙虚な自分自身にたちかえることが必要でありましょう。

浄土のはたらきは、実はそのような人間の自己中心の迷心をことごとくうち破り、憎しみや対立を越え、自他ともに生かされる平和で自由への道を開くものであります。生死を超えていくいのちの帰依処をこの人生に賜ることは、つねにそのような一人ひとりの生き方が厳しく問い直されていくということでなければなりません。

親鸞聖人は、浄土真宗には往相（浄土に往き生まれていくすがた）と還相（穢土にかえって教化をあらわす）の二回向があると示されています。つまり私たちの往生浄土の目的が、ひとえに衆生を利益することにあるといわれるのです。『御消息集』には、わが身の往生一定とおもう人は「世のなか安穏なれ、仏法ひろまれ」（同784頁）との願いをもって、世の人々の苦しみや悲しみに思いをいたし、たえず自己のしあわせを求めるエゴのこころをひるがえし、もろびとのしあわせを実現する世界を願うべきであるとの意を、関東の念仏者に手紙をしたため教示しておられます。

往生浄土とは、この人生の今、ここにおける煩悩具足の凡夫の救いを明らかにし、自己をつねに善とし是とする私自身の生き方そのものを転換していく教えです。それは決して人生に行き詰まることや、未来の死を意味するものではなく、この迷いのいのちが開かれ、まことのいのちを成就し、人間完成へと向かう道であるともいえましょう。

このかけがえのないひとたびの人生をどのように処して生きていくのか。またどうすれば生と死の全体を真に意義あらしめることができるのか。亡びゆくだけの人生で終わるのではなく、永遠のさとりの生を実現していく道が与えられた私たちにとって、浄土へと歩む一日一日のプロセスはまことに重要であります。

浄土とは「浄仏国土」であり、穢土をどこまでも浄化してやまないさとりの根源であります。それはつねにこの現世を光明をもって照らし、また名となり声となって、つねに煩悩の身を摂取してやまないはたらきとして実在しているのです。

（伝道担当）